

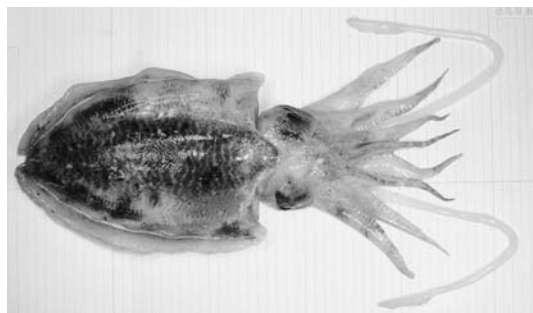
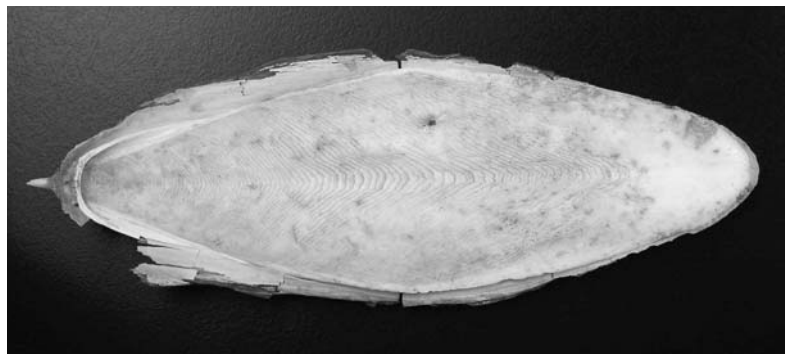
イカのカイ

秋の浜辺で、イカの貝を拾いました。

長さ10〜20cm。まるで小さな白いサーフボード。そんなものを見付けたことはありませんか？

プラスチックか何かでできているようにも見えますが、人工物ではありません。実はこれ、イカの仲間、コウイカ類の「貝殻」なのです。

貝殻といっても体の外側を覆っているわけではありません。コウイカの体内にある骨



コウイカ (提供:徳島県水産研究所 上田幸男さん)

のようなもので、「甲」と呼びます。スルメイカなどの体内にある透明なプラスチックみたいなもの、あれと同じです。

「貝」というと、普通は二枚貝や巻貝などをイメージしますが、生物学的には「軟体動物門」という、動物界の中のもとても大きなグループを指します。タコやイカも軟体動物なので、貝の仲間なのです。大昔、アンモナイトのような、彼らの先祖が持っていた貝殻の名残が、このコウイカの甲です。

同じように貝殻を持つタコ・イカの仲間には、オウムガイ、アオイガイ(カイダコ)などがあります(アオイガイの殻はメスが卵を保護する容器で、ほかの貝殻とは起源が違います)。

コウイカの仲間は日本近海で22種が知られていますが、いずれも温・熱帯の海に生息する暖流系の種で、生体は石狩周辺ではほとんど見られません。

コウイカの甲は、普通の貝殻と同じ石灰質でできていますが、

スポンジ状でとても軽く、水に浮きます。死んで肉が腐ったり、魚に食べられたりした残りなどが海面を漂い、石狩まで流れてくるのでしょうか。浜辺に漂着していた甲の中には、長い間海を漂ってきたためにフジツボがたくさん付着しているものや、イルカにかじられたのか、歯形の付いたものもあります。

秋に数多くの漂着が見られるのは、やはり暖流系のアオイガイと同じです。日本海を北上する海流、対馬暖流に乗って流れてきたところを、冬が近づいて吹き始めた北西季節風によって吹き寄せられる、というメカニズムのようです。

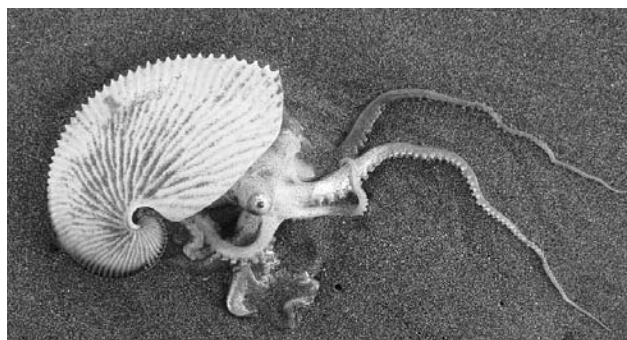
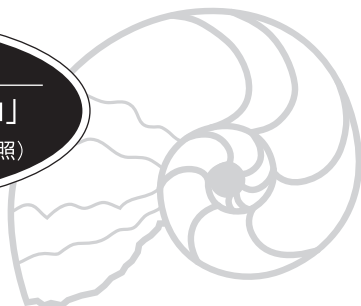
これまでに採集した漂着コウイカ、よく調べてみると、少なくとも3〜4種類はありそうです。暖流系の生き物が、思ったよりもたくさん、北まで流れてきているらしいことが分かってきました。

(志賀健司)

資料館テーマ展

「アオイガイ／カイダコ」

9月より開催! (18ページ参照)



アオイガイ(カイダコ)。これも貝殻を持つタコ。

■文化財課・いしかり砂丘の風資料館

☎62-3711

✉bunkazaih@city.ishikari.hokkaido.jp